

# JICA草の根技術協力事業（ミャンマー） の成果と地域住民の声

独立行政法人 国際協力機構 東京センター  
市民参加協力第二課 平田 さゆり

## 目次

- JICA草の根技術協力事業とは
- 国際インフラパートナーズ様の  
ミャンマーでの草の根技術協力事業
- JICA草の根技術協力事業の評価と現地の声

## JICA草の根技術協力事業とは

国際協力の意志のある日本のNGO/CSO、地方自治体、大学、民間企業等の団体が、これまでの活動を通じて蓄積した知見や経験に基づいて提案する国際協力活動を、JICAが提案団体に業務委託してJICAと団体の協力関係のもとに実施する共同事業である。

### 重視するのは3点：

1. 日本の団体が主体的に行う、人を介した「技術協力」。
2. 開発途上国の地域住民の生活改善・生計向上に役立つ。
3. 国際協力への理解・参加を促す機会。

### 事業形態：

- ①草の根パートナー型 5年以内 総額1億円以内
- ②草の根協力支援型 3年以内 総額1,000万円以内
- ③地域提案型／地域活性化特別枠 3年以内 総額3,000万円以内  
(地域活性化特別枠は総額6,000万円以内)

### 年に2回募集！

応募前のコンサルテーション必須。

\*詳しくはJICAホームページまたは国内機関にご連絡ください。

## 国際インフラパートナーズ様の ミャンマーでの草の根技術協力事業

### 第1フェーズ：草の根技術協力事業（支援型）

事業期間：2012年6月～2014年9月（2年3か月）

事業名：「エーヤワディー・デルタ地域における雇用促進のための労働集約型道路整備（路面処理）に関する人的資源開発事業」

事業費総額 10,000,000円

### 第2フェーズ：草の根技術協力事業（パートナー型）

事業期間：2016年4月～2021年4月（5年間）

事業名：「貧困地域における労働集約型簡易舗装工事の持続的な自立実施支援事業」

契約金額：24,000,000円



**道路 未来へ続く道を作る**

**取り組み ▶▶ 技術基準づくり**

**舗装工事の現場で技術を定着させるためのマニュアル作成**

■■■■ NPO国際インフラパートナーズ(東京都)  
 ■ ミャンマー ■■■■ エーワディアルタ地域における雇用促進のための労働集約型道路整備(路面処理)に関する人的資源開発事業

ミャンマーの地方では、道路の舗装工事がと地域住民が一時的に雇われて作業にあたることも多い。しかし、技術マニュアルが英語版しかなく、現場で作業する人たちに活用されていると言えない状況だった。そのため、舗装の技術は向上せず、大型トラックやバスの運行により雨季のたびに道路が陥み、毎年修復しなければならなかった。より耐久性のある舗装技術を伝えると同時に、現場で使えるミャンマー語の技術マニュアルが必要だ――そうしたミャンマー側のニーズに応え、JICA草の根技術協力事業が行われている。主体

は、同国で長年道路や橋梁の技術協力を行ってきたNPO国際インフラパートナーズだ。

現場はデルタ地域にあるエーワディ地区イェイ村。2012年から14年に行われた第1フェーズでは、地域住民の雇用を増やすことも視野に入れた人々のための舗装技術を、16年から始まった第2フェーズではアスファルトやコンクリートでの舗装技術を使い、地域の人々と一緒に道路を整備した。

併せて事業開始当初からミャンマーと日本の両国で「技術委員会」を設立し、作業する人に実際に役立つ内容を練り上げていった。「日本側の技術委員会には、日本の道路の国家基準を策定している「日本道路協会」の方が参加しています。こうした協力をいたしたかげは、非常に役立つ草の根の事業だからです」と語るのは、国際インフラパートナーズの神長耕三さん。日本の舗装の考え方をベースに日本側で作成した第1フェーズのマニュアル案にはミャンマー側からの細かい意見や具体的な提案が追加され、ミャンマーでも無理なく使える英語版とミャンマー語版の実用的なマニュアルが完成した。

「今は、第2フェーズの技術マニュアルづくりに取り組んでいます」と神長さん。「この事業は、舗装の技術を持つ人を育てるプロジェクトであり、ミャンマーの道路整備に関わる多くの人にその技術を伝える事業でもあります」。次は道路の維持管理の技術にも取り組もうという話が、すでにミャンマーとの間に出ているそうだ。

第1フェーズで完成したミャンマー語版のマニュアル。

「**第1フェーズ**」

舗装が完成したところで陥みが発生し、ここには道路。走行中のバスが滑ってしまうことも。

舗装が完了した途、この後、イェイ村では近隣の町まで高品質の舗装工事を行い、それまでは時間がかかっていたところ、わずか20分で行けるようになった。村は大いに活気づき、町に発展した。

「**第2フェーズ**」

第2フェーズでは、コンクリートによる、より高品質の舗装技術が使われた。

今年2月には、コンクリートの舗装道路が完成した。今はマニュアル作成が準備に入っている。

「**西国の道路の専門家が集まった**」

ミャンマーと日本の合同技術委員会では、施工の技術的なことからマニュアル作成に向けた事業などについて実際に議論が行われた。

## JICA草の根技術協力事業の評価の視点

### 1) 妥当性

- ・プロジェクトは現地事情やニーズに合っていたか？
- ・ターゲットグループ、対象地、C/P等の選定は適切だったか？
- ・計画やアプローチはプロジェクト目標で目指す問題解決を実現するのに適切だったか？
- ・事業開始時の(プロジェクト目標達成のための)外部条件の認識は十分だったか？
- ・プロジェクトを実施するにあたり、受託者の有する知見・技術・強みは活かされたか？等

### 2) 実績とプロセス

- ・アウトプットは達成されたか？
- ・計画(人員・予算・機材調達)は予定どおりの投入と期間ですべて実施されたか？
- ・予定どおりいかなかった場合、どのような阻害要因によりそれは引起されたか？
- ・予定どおりいかなかった場合、どのように現場状況に適した対応・事業運営を行い、アウトプット達成を目指したか(途中の計画やアプローチの変更等)？
- ・お金や労力は無駄なく使われ、実績を上げたか？等

### 3) 効果

- ・事業により目指していた変化はもたらされたか(プロジェクト目標は達成されたか)？
- ・事業の取組みは問題の解決に役立ったか？事業によりもたらされた変化は、当該事業によるものか？
- ・プロジェクト目標達成に対し、アウトプットはどのように貢献したか？
- ・変化をもたらす上で、どのような促進要因があったか？
- ・事業はどのような直接的な効果をもたらしたか？等

### 4) 持続性

- ・事業によりもたらされた変化が草の根技術協力事業終了後も持続するための工夫はなされているか(人的／組織的／予算的体制の整備などのインプット。受託者の人的／予算的体制を含む。)？
- ・上記の工夫のために必要とされるインプット等は、現地の人々の自主的な活動や政府の取組みで対応できるか？
- ・上記対応に支障がある場合、その阻害要因は何か？また、それを克服するにはどのような手立てが必要か？等

## 1) 妥当性

## 2) 実績とプロセス

## 3) 効果

## 現地の声



- ・舗装工事への参加が初めてでも、作業前に作業工程の説明と実演があるため、作業内容が理解が出来る。
- ・村人は毎日この道を使っており、毎年当該道路の舗装修復工事を行っているのを見てきたが、今回の工事の様子を見るだけで質の良さがわかる。長持ちしそうで嬉しい。
- ・これまで(事業開始前)はマニュアルの中身を見たことはなかったが、新しいマニュアルを読みたい。

(試験工事に参加した住民の声)

- ・試験工事により道がきれいになり、バスの本数も増え、買い物に行きやすくなった。
- ・イエガレ村からモジョンまでの道の両脇に商店が立ち並ぶようになった。
- ・本事業を通して、イエガレ村は村から町に格上げになる。
- ・近隣の村から住民がイエガレ村に移住してきた。

(第1フェーズで試験工事を行ったイエガレ村の住民の声)





- ・本事業は、ミャンマーと日本の良い交流となっている。
- ・作成されたマニュアルは、若い世代に配布したい。  
(建設大臣)
- ・今回、技術移転された方法であればコストも抑えられる。
- ・日本からの技術移転を歓迎している。
- ・日本の舗装の歴史には興味があり、大学でも教えている。  
(建設省道路局長と職員)



## 4) 持続性

ご清聴ありがとうございました。